

# 総説 元亀争乱と北近江

## 浅井長政と信長包囲網の軌跡

107

太田浩司 長浜市長浜城歴史博物館



▲浅井長政像（長浜市長浜城歴史博物館蔵）

### 浅井長政の信長離反

元亀元年（1570）4月20日、織田信長は3万の大軍を率いて、自らの上洛命令に従わない、越前の朝倉義景を討つため京都を發つた。信長はびわ湖の西岸を北上、25日には敦賀郡にある朝倉氏の居城・手筒山に襲いかかり、一日で陥落させた。この猛攻に恐れをなした、近くの金ヶ崎城と疋田城の朝倉軍は、翌日降参している。

ところが、信長が木芽峠を越えて一乗谷に迫ろうとした時、浅井長政が離反したという知らせが届く。その長政逆心の期日は、どの記録も正確に記さないが、おそらく28日のことだろう。信長は殿に木下秀吉・明智光秀らを残し、朽木元綱の案内で「朽木谷」を経て、30日深夜には京都に着いている。信長が浅井の逆心を知った時の驚きの言葉が、「信長公記」に載る。「浅井は歴然御縁者たるの上、剩江北一円に仰せ付けらるゝの間、不足これあるべからざるの条、虚説たるべし」とある。長政離反は「虚説」「嘘」だろうというのである。これが、信長の正直な思い

だった。

では、長政はなぜ信長を裏切ったのか？ 浅井方の記録は、その理由をまったく語らないが、織田信長が毛利元就に送った同年7月10日の覚書には、浅井は「近年別家来せしむるの条、深重隔心無く候き、不慮の趣是非無き題目に候事」とある。すなわち、長政は信長の家来となって、心の隔たりなく付き合ってきたが、このような理不尽な結果になってしまったと述べているのである。信長は長政を家臣同様に思っていたのである。

長政側に見れば、独立した一大名でありながら、信長の家臣として扱われることが、どうしても許せなかった。長政は信長の一家臣となることを拒むため、朝倉義景や三好三人衆、それに本願寺・比叡山などによって、徐々に形成され始めていた信長包囲網に加わり、拳兵したと考えるべきだろう。「浅井三代記」は長政離反の理由を、朝倉氏との祖父以来の同盟を重視したと記すが、戦国大名が過去の恩義にとらわれては成り立たない。長政は信長包囲網という軍事同盟の中に、浅井氏存続の活路を見出そうとしたのである。

### 姉川合戦に至る経過

信長は京都から岐阜に戻り、浅井・朝倉攻めの準備を整える。近江侵攻に先だって、近江・美濃国境の砦・長比城（米原市柏原など）を守っていた、浅井側の堀秀村と樋口直房の

誘降に成功した。信長軍は、6月19日に北近江に侵攻、小谷城を見上げる虎御前山に陣を敷き、秀吉以下の家臣に命じて、小谷城下を放火してまわらせた。しかし、堅固な小谷城を一時に攻めるのは無理と判断し、全軍を退かせ、24日には後方の横山城（長浜市と米原市の境）を包囲し、自らは徳川家康と共に

龍ヶ鼻（長浜市東上坂町）に陣した。

これに対し、浅井軍5000人は越前から来援した朝倉景健（義景の甥）軍8000人と一時、大依山（長浜市大依町）に拠つたが、28日未明までには、姉川北岸の野村・三田村（長浜市野村町・三田町）に移動した。両軍、姉川を挟んで対峙することになったが、信長の正面には浅井軍が、家康の正面には朝倉軍が位置する形となる。合戦は28日未明に始まり、浅井・朝倉軍にとって致命的な敗戦とはならなかったものの、勝利はできず後退した（13～18頁に関連記事）。

### 佐和山入城と志賀の陣

信長は退却する浅井・朝倉軍を追って小谷城下を放火したが城攻めは避け、合戦後に接収した横山城に木下秀吉を入れ、自らは7月6日には京都へ帰っている。姉川合戦に参陣した浅井氏家臣のうち、坂田郡南部の天野川流域の武将たちは、磯野員昌に従って坂田郡と犬上郡の境の佐和山城（彦根市）に入城し、信長へ抵抗をこころみるが、これには丹羽長秀を当て見張らせた。

信長軍はこの後、7月には三好三人衆らと摂津で戦うが、その途中で9月12日には大坂本願寺が離反、さらに姉川合戦での余力を残していた浅井・朝倉軍が湖西を南下し、比叡山上に立て籠もった。この浅井・朝倉軍に対応するため、近江に戻り信長軍が比叡山を包囲したのが志賀の陣である。対陣は12月まで

続き、朝廷・幕府の仲介により、一応の和睦が成立した。この志賀の陣で信長は、比叡山下に3ヶ月も釘付けとなった。

### 箕浦表の合戦

元亀2年（1571）に入ると、2月24日、浅井軍の最前線で佐和山城に籠城していた磯野員昌が、信長方となり離反する。本来は小谷城に撤退するつもりであったが、長政に信長と同を疑われ離反したと「嶋記録」は伝える。

5月6日、浅井軍と信長軍の大きな衝突が坂田郡南部であった。箕浦表の合戦である。秀吉が徳山右衛門なる人物に宛てた5月11日付の書状によれば、浅井軍が鎌刃城（米原市番場）がある箕浦庄まで出撃して来たため、これに秀吉らが応戦した。さらに、秀吉軍は浅井軍が八幡庄（長浜市街地付近）へ逃れるのを追撃し、敵を海（湖）へ追い入れて勝利したと記す。この合戦の様子は、「信長公記」にも記されており、浅井軍には一向一揆が混じっており、下坂の「さいかち浜」に逃れた敵も秀吉軍が討ち破ったとある。秀吉文書にいう「海」とは、この「さいかち浜」のことである。浅井軍や一向一揆軍は追い詰められ、多くの溺死者が出た合戦となった（19～21頁に関連記事）。

この年、信長は8月18日に近江に出陣、北近江を攪乱した後、9月12日には前年の信長の申し入れを無視し、浅井・朝倉軍を匿った



▶姉川合戦 両軍対陣図（通説による）